

殺人事件 電気紙芝居

辻真先



辻真先

電気紙芝居
殺人事件

講談社

電気紙芝居殺人事件

一九八九年二月二十八日 第1刷発行

著 者 辻 真先

発行者 加藤勝久

装 幀 安彦勝博

装 画 植手幹夫

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一〇二
電話 東京(〇三)九四五―一二一(六代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 一 二 〇 〇 円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本に
ついてのお問合せは、文芸局文芸図書第二出版部宛にお
願いたします。

© 辻 真先 1989 Printed in Japan

目次

事實

五

第一部

独白

一一

企画

八七

日記

九二

現實

一四八

第二部

手紙

一六〇

告発

一九二

記録

一九七

眞実

二二七

あとがき

二三〇

電気紙芝居殺人事件

今日のマス・コミの在り方を見るに、大衆の喜びそうなものは何でも食いついていく。(中略) テレビに
いたっては、紙芝居同様、いや、紙芝居以下の白痴番組が毎日ずらりとならんでいる。

(大宅壮一『週刊東京』昭和32・2・2)

事 実

濃い霧が、彼の視界を閉ざしていた。

霧は疾走する車の中にも、容赦なく忍びこんでくるようだ。息苦しさに、彼はネクタイをかなり捨てた。

ミルク色の空間を撫でているライトが、ひどく無力なものに思われた。畜生、なんだってこの車は、こんなに遅いんだ？

このスピードでは、とうてい間に合わない。悲劇を食い止めることは、できない！
ともすれば悲鳴がほとばしりそうになる口を、必死にむすんで、彼は前をさえぎる白い壁をにらみつけた。

最後まであきらめるな。

そうとも、まだ希望はある……彼女が俺に投げつけた言葉が、すべて本物だと信じてはいけない。いや、彼女が嘘をついたという意味ではない。覚悟のほどをぶちまけたおかげで、彼女の硬直した心が少しはほぐれただろうからだ。

「あいつを殺す」

そう彼女は、絶叫した。

いつも微笑しているような印象の、ふだんの彼女からは、想像もつかない感情の激し方だっ

た。

電話をうけた彼は、滑稽なほど狼狽した。なにひとつ、忠告めいた言葉が出ないうちに、いつの間にか電話は切れていた。

彼女を殺人犯にすることはできない。

いても立つてもいられない思いが、彼に車を運転させた。そして、いま。

霧の中で彼はもがいている。

走つても走つても前へ進むことができない、夢の世界の焦燥を味わつて、彼の額に汗が浮かんだ。

最後まであきらめるな。

希望を持て。

よせよせ、気休めをいうなよ。

電話をうけてから、かれこれ一時間以上たつ。ことはとくに終わっているさ。

なぜ、そんなことがわかる？

そうとも、あれから彼女は、理性をとりもどしたに決まっている。

いまさらあいつを殺して、なんのメリットがあるというんだ。

それぐらいのことは、彼女だつてわかっているはずだ……

自分で自分を納得させようと、彼は胸の中でくりかえした。そのくせ胸のどこかに淀んだ鉛は、少しもかるくならないのだ。

(間に合う、きつと！)

(無駄だ、すべては遅いんだ！)

——突然霧の中に、霧より白いものがあらわれた。去年誘われてここへ来たときに見た、別荘地の看板だ。

『緑と太陽のパラダイス アズミノ・サン・ビレッジ』

なにが緑だ、なにが太陽だ。腹立たしかつたが、おかげで彼は自分のとつた道が、正しかつたことを確認できた。

看板さえみつければ、あいつ——長淵章の別荘はすぐわかる。

あたりは静まりかえっていた。それでも朝日はのぼっているのだろうか。霧はやや晴れてきたが、晩秋の別荘地の人気なさに、変わりはなかった。

彼は道なりに車を右へカーブさせた。突き当たりが、長淵家のはずだ。

舗装が切れると、車はてきめんに揺れた。タイヤが小石をはねる感覚があり、唐突にあいつの別荘があらわれた。ペンション風に柱は青、壁は白と塗りたくつてある。注文したのがオーナーだとすれば相当以上にけばけばしい男だ。

彼が車を停めると、あたりはたちまち無音の世界になった。鳥の声さえ霧に吸われてしまったようだ。

左右を見たが、彼女の車らしい影はない。

間に合つたのだろうか。

それとも……

喉の渴きをおぼえながら、枯れた雑草を踏んで、玄関に立った。ブザーのボタンを押す。大袈裟な音で鳴りひびいているのが、よく聞こえた。

数秒、待つ。

答えはなかった。

留守か？ いっそそれなら、いい。

そうであることを祈りながら、ドアノブをつかんだ……回して、押す。
キィ。

いやな音だ。

畜生、と口の中でくりかえしてから、彼は奥にむかつて声をかけた。

「長淵さん」

むろんなんの応答もない。古沼に石を投げ入れたようなものだ。全身の弛緩をおぼえながら、彼はよろめくように絨毯の上にあがった。

間に合わなかった……駄目だった。

空しい思いが胸を噛む。

正面のドアをあけると、リビングルーム。

絨毯の色がダークブラウンから、ミルクホワイトに変わり、毛足が長くなった。

ソファ、ロッキングチェア、アームチェア、人影はない。むろん彼の、血にまみれた姿も。

ダイニングにも、書斎にも、だれもいなかった。

あきらめきつてただけに、蘇る思いだった。

そうだ、もしかしたらあいつは、彼女を説得することに成功したのかもしれない。それはそれでいまいましい気分になったが、最悪の場面を回避できただけでも、ベターである。長淵の達者な口に、感謝する必要があった。

だが、待てよ。

悲観的なもうひとりの彼が、耳もとでささやいた。

まだバスルームがのこっているぞ。トイレもあるぞ。

わかつたよ、と彼は首をふった。

ここまで来たら、徹底的に検分してやるさ。家中くまなく探して、死体のシの字もないとわかつて、はじめて安心できるのだ。ではまず、バスルームから。

およその見当をつけて、ガラス戸を開ける——果たしてそこは、脱衣室だった。だれもいない。

いや、もう一枚のドアのむこうに、人の気配があつた。

彼はドアを開けた。

タイルの上に、写真で見た長淵章が倒れていた。その背に突き立ったナイフの柄を見ても、今さらおどろきの声は出なかった。

期待通りというのもおかしいが、やはり手遅れだったことを知って、彼はむしろ得心していた。

やつちまつたか、とうとう！

胸の鉛が限界にまでふくれあがつた。間に合わなかった、彼女を殺人犯にしまった、その痛切な思い。

だが、次の瞬間、彼は飛び上がりそうになった。

「う……」

死体のはずの章が、突然うめいたのだ。うめきつつ、章は体を起こそうとした。血の気をなく

した顔が、ゆっくりと回転して、彼を見据えた。
「助けて……くれ」
章が唇をわななかせた。

第一部

独 白

1

なん度か便器にむかって、腰をふった。どうも切れがわるい。残尿感がへその下にのこっている。だがそんなに長く、レポーターを待たせたくはなかった。

俺はあきらめて、ズボンの前を点検した。ごく稀にだが、小用の染みがついていることがあるからだ。

ついでに、鏡を見た。櫛を使う。悲しいほど薄くなった髪。まさかカメラマンが、俯瞰で俺を撮る、なんていやしないだろうな。

俺は鏡にむかって、胸を張ってみせた。なんといっても、奴らの大先輩である。テレビがなんだ。カメラがなんだ。そんなものが怖くて、おまんまが食えるか——とうそぶくには、俺はテレビから遠ざかりすぎていた。

今年、日本のテレビは誕生して三十五年になる。

ということだつて、実は忘れていた。テレビがおぎゃあと生まれてから、笑い、しゃべり、立ちして、やがて精一杯のやんちゃぶりを発揮しはじめるまで、ずうっと面倒みていたこの俺が。

無理もないか。いまの俺は東京すら離れて、信州松本の郊外浅間温泉の一隅にひっこんでいるのだから。

俺がトイレから出てくると、技術スタッフはまだ根気よくカメラの調整をつづけており、炬燵にもぐりこんでいたレポーターの可能キリコが、にこにこして話しかけた。

「いいとこですね、鬼堂先生」

「その先生はやめようよ」

もそもそと、炬燵布団の裾をめくりながら、俺はいった。

「だいたいあの時分のテレビで、プロデューサーやディレクターを先生と呼ぶ奴なんぞ、めったにいなかった」

それは本当だ。芝居や映画畑から来た役者たちは、例外なくテレビのお粗末きわまりない設備と、リハーサルぶりに茫然とした。本読みのはずで集まったのに、肝心のシナリオができていない、なんてのは日常茶飯事だった。

ふだんたつぷりと稽古を積んでいる新劇の俳優は、だから悲惨だ。

当時名の売っていたベテラン俳優が、はじめてテレビに出演したときのこと。前夜一度本読みをやり、当日になってカメラリハーサル、つづけてカメラハを二度やった。はじめはしくじると小返ししながら、二度目はランスルーといって、多少のミスには目をつむって、ひと思いに通し稽古をやつつける。

さもないと、ドラマ全体の放映時間を見究めることができない。三十分番組に四十分かかったら、事後の放送の予定が目茶苦茶になってしまう。

もちろん当時はビデオなどないから、すべて生放送だ。タイムキーパーという職種も存在しない。すべてディレクターが、カンでドラマをすすめてゆく時代であった。

三度も稽古をしたのだから、どの役者もすべて台詞がはいっているものと、ディレクターは信じていた。というより、役者の記憶力のことを心配している余裕が、本番直前のディレクターにあるわけがなかったのだ。

カメラ、照明、効果の各技術部門はいうまでもなく、その統括者であるテクニカル・ディレクター通称T・Dや、本番中ディレクターの隣に座って画面を切り換えるスイッチャー、あるいはディレクターの手足となって、スタジオ内を取り仕切るフロア・ディレクター通称F・Dたちに、あれこれ指示を出さなくてはならない。口が一ダースあっても間に合わないほどだ。

いざ、本番がはじまった。

次のカットは、老人役のベテラン俳優だ。その顔のアップが撮られて、副調整室——俺の時代には略して「副調」といったが、いまはサブというようだ——のモニター画面にスタンバイしている。

ちらと見て、俺はいやな予感にとらえられた。

老人はタバコを吸っている。そのタバコが、突然びりびりと震え出したのだ。

（じいさん、あがつてる！）

あのベテランがと、信じられない思いだったけれど、とにかくヘッドホーンを通して、F・Dの注意を喚起した。

「井波ちゃん！警戒警報だ」

つい戦時用語を使ってしまった。年が知れる。井波にはよく聞こえなかったらしい。

「は？」

聞き返された。まだCHKに入社して間もないフロア・ディレクターだから、心もとなかったけれど、仕方がない。

「大場さんが、台詞はいつてないみたいだよ！」

「あ、はいっ」

すつとんで行く様子が、副調の金魚鉢からチラリと見えた。実際、金魚鉢とはよくいったものだ。この当時は、すべてプロデューサーがディレクターを兼任していたから、演出家といえば、大権力者だ。だがいくら彼が、番組の全権をゆだねられていても、一旦放映が開始されれば、手も足も出ない。ガラス鉢の中の金魚のように、口をパクパクさせて目玉を光らせているのが関の山だ。生殺与奪の権はすべて、スタジオに下りているフロア・ディレクターのものである。

だから、「私は貝になりたい」などのドラマで売り出したラジオ東京テレビ——TBSと名が変わったのは、俺がCHKをやめた後のこと——では、フロア・ディレクターがヘッドホーンを使わない、と聞いた。リハーサルの際にドラマのリズム、テンポをのみこんでおいて、いざ本番となるとサブの指示を待たずに、フロア・ディレクターが自分の裁量で、キューを出す。

本当かなと思っていたが、ラジオのスタジオを見学に行ってみると、たしかにフロア・ディレクターが、自分のペースで本番を動かしていた。あまり鮮やかだったので、後でそのF・Dの名前を聞いた。実相寺昭雄という男だった。古くは「ウルトラマン」、最近では「帝都物語」を監督した人物である。